

ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベント教会 第二

Jeff Pippenger

2025-12-02

二番

私は、あの時にもまさる力をもって五旬節の日の出来事が繰り返される時を、切なる思いで待ち望んでいる。ヨハネはこう言う。「私は、大いなる力を帯びた別の御使いが天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。」その時には、五旬節のときと同じように、人々はそれぞれ自分の言葉で自分たちに語られる真理を聞くことになる。

主は、まことにご自身に仕えたいと願うすべての魂に新しいいのちを吹き込み、祭壇から取った火のついた炭でその唇に触れて、主の賛美を雄弁に語る者とするのがおできになる。幾千の声が、神の御言葉の驚くべき真理を語り出す力に満たされるであろう。ども舌は解き放たれ、臆病な者は強められて、真理のために勇敢に証しする者とされるであろう。どうか主が、ご自分の民を助けて、魂の宮からあらゆる汚れを清めさせ、また、後の雨が注がれるときそれにあずかることができるほど、主との親しい交わりを保たせてくださいますように。Review and Herald, 1886年7月20日

ペンテコステを主の祭りとして考えるとき、それは過越祭、種入れぬパンの祭り、初穂の捧げ物、そして七週の祭りとして切り離して考えることはできない。ペンテコステは期間であり、同時に時点でもある。だからこそそれは「ペンテコステの季節」と呼ばれる。その季節はキリストの死、埋葬、復活によって始まった。昇天の後、キリストは四十日間の個人的な教えを始め、それに続いて一致が成し遂げられた二階の広間での十日間があった。9/11は、アメリカ合衆国における日曜法で終わる期間を開始した。その日曜法は、時点としてのペンテコステの日によって表されている。すなわち、それは9/11に始まった期間が先行する時点である。9/11から日曜法に至るまで、「ペンテコステの季節」は繰り返される。

ペテロは、「火の舌」と呼ばれる奇跡的な現象は酔っ払った愚行ではなく、ヨエル書の成就であると説明した。これは、そのメッセージに対して論争が持ち上がったためである。「舌」はメッセージの伝達を表し、火は聖霊を表す。ペンテコステのメッセージは、神性（神は焼き尽くす火である）と、人間の舌という人性との結合を表している。ペテロが後の雨の時代における十四万四千人を代表しているように、あれこれと難癖をつけるユダヤ人もまた、まさに後の雨が降っているその時点で素通りされつつある、以前の契約に属する民を代表している。

そして彼らはみな聖霊に満たされ、聖霊が語らせたとおりに、ほかのことばで語り始めた。さて、そのころエルサレムには、天の下のあらゆる国々から来た信心深いユダヤ人が住んでいた。このことが知れ渡ると、群衆が集まってきて、皆驚き感った。それぞれが自分のことばで彼らが語るのを聞いたからである。人々は皆驚き、不思議に思っ互いに言った。「見よ、語っているこの人たちは皆ガリラヤ人ではないか。どうし

て私たちはそれぞれ生まれ故郷のことばで彼らが話すのを聞くのだろうか。パルティア人、メディア人、エラム人、またメソポタミアに住む者、ユダヤ、カッパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフリア、エジプト、さらにキレネに近いリビアの地方にいる者、またローマから来た者たち-ユダヤ人も改宗者も-、クレタ人やアラビア人まで、私たちは自分たちのことばで彼らが神の大いなる御業を語るのを聞いているのだ。」人々は皆驚き、当惑して互いに「これはいったいどういうことだ」と言い合った。しかし、ほかの者たちは嘲って、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言った。するとペテロは十一人とともに立ち上がり、声を張り上げて彼らに言った。「ユダヤの人々、またエルサレムに住むすべての人たちよ、よく知っておきなさい。私の言葉に耳を傾けなさい。あなたがたが思っているように、彼らは酔ってはいない。今はまだ朝の九時にすぎないのだから。」使徒の働き 2:4-15.

ペテロは、ペンテコステをヨエル書の成就として説明している。彼は、全世界が代表されている場で、それを預言的に行っている。というのも、その箇所は聴衆が「天下のあらゆる国々から」来たと述べているからである。9/11に地はキリストの栄光で照らされ、そして日曜法のときには再び、全世界の前に旗印として高く掲げられるとき、十四万四千人はキリストの栄光を完全に反映する。ペンテコステの時代は9/11に始まり、日曜法で終わる。

私たちの品性に一つでも汚点やしみがあるうちは、だれ一人として神の印を受けることはない。品性の欠陥を正し、魂という神殿をあらゆる汚れから清めることは、私たち自身に委ねられている。そのとき、五旬節の日に弟子たちの上に前の雨が降ったように、後の雨が私たちの上に降り注ぐだろう。

私たちは自分の成し遂げたことに、あまりにもたやすく満足してしまう。私たちは自分は富み、持ち物が増し加わったと感じ、自分たちが『みじめで、衰れで、貧しく、盲目で、裸である』ことを知らない。今こそ、真実な証人の勧告に耳を傾けるときである。「わたしから、火で試された金を買いなさい。そうすればあなたは富むようになる。また、白い衣を買いなさい。あなたが身にまとい、あなたの裸の恥が現れないためである。そして、目に目薬を塗りなさい。そうすれば見えるようになる。」…

今こそ、私たち自身と私たちの子どもたちを、世からの汚れに染まらないよう守らなければならない。今こそ、私たちの品性の衣を洗い、それを小羊の血によって白くしなければならない。今こそ、高慢、情欲、そして靈的怠惰に打ち勝たなければならない。今こそ、目を覚まして、品性の均整のために断固たる努力をしなければならない。「きょう、もし御声を聞くなら、心をかたくなにはならない。」私たちは、主の現れを待ち望み、見張りつつ、非常に試練の多い立場にある。世は暗闇の中にある。「しかし、兄弟たちよ」とパウロは言う、「あなたがたは暗闇の中にはいない。その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはない。」待ち望み、慕い求める魂のために、神の御旨はいつも、暗闇から光を、悲しみから喜びを、疲れから安息をもたらすことである。

兄弟たちよ、あなたがたは備えという大いなる業において何をしていますか。世に結びついている者は世俗の型に染まり、獣の刻印を受ける備えをしています。自己を信用せず、神の前にへりくだり、真理に従うことによって魂を清めている者たちは、天の型を受け、額に神の印を受ける備えをしています。布告が発せられ、刻印が押

されるとき、彼らの品性は永遠にわたって純潔で汚れのないままに保たれる。

「今こそ備える時である。神の印が、汚れた男や女の額に押されることは決してない。野心に満ち、この世を愛する男や女の額に押されることも決してない。偽りの舌をもち、欺きの心を抱く男や女の額に押されることも決してない。印を受けるすべての者は、神の御前にしみのない、すなわち天の候補者でなければならない。前進しなさい、兄弟姉妹たちよ。今はこれらの点について簡単にしか書けない。ただ、備えの必要にあなたがたの注意を喚起するにとどめる。自ら聖書を調べ、今この時の恐るべき厳粛さを理解しなさい。」『証言』第5巻、214、216。

ここでホワイト姉妹は、米国における日曜法-「布告が出されるとき」-と一致する時点として、ペンテコステを特定している。しかし、彼女は日曜法とペンテコステを時点として示しているものの、備えを呼びかける彼女のメッセージは、ペンテコステの季節に象徴される、日曜法に先行する期間を指し示している。日曜法は第七日安息日の試験であり、9/11から日曜法に至るまでの期間は、象徴的な「主の備えの日」と見なすことができる。備えは試験に先立つ。

「後の雨が降り注ぐ」のは十四万四千人であり、ちょうど「五旬節の日に初めの雨が弟子たちの上に降った」と同様である。五旬節期として表されるその期間は、キリストが昇天から戻られたとき、ぱらつく小雨から始まった。

こう言うてから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」ヨハネによる福音書 20章22節

彼の息は聖霊を伝える。言葉の音を生み出すのも息である。イエスは御言葉であり、彼の息はその御言葉を与えることを通して聖霊を伝える。息こそがアダムの身体に命をもたらした、また息こそがエゼキエルのよみがえった枯れた骨の軍勢に命を与える。

キリストが弟子たちに聖霊を吹きかけ、彼らにご自身の平安をお授けになったその御業は、ペンテコステの日に与えられる豊かな降り注ぎに先立つ、ほんの数滴のようなものであった。『預言の霊』第3巻、243頁

聖霊降臨節の初めに、キリストの「息」が弟子たちに聖霊を与えたが、疑う者もいた。

しかし、十二弟子の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちは彼に言った、「私たちは主を見た。」しかし彼は彼らに言った、「もし私がおの手で釘の跡を見、その釘の跡に私の指を入れ、さらに私の手をその脇腹に差し入れてみなければ、私は決して信じない。」ヨハネ 2:24、25。

ペンテコステの時期は「試練」の時の始まりであり、その起点はキリストが息を吹きかけたことと、トマスの疑いをめぐる論争にあった。初めのトマスの論争は、ペンテコステの時期の終わりにおけるユダヤ人の論争の型を示している。キリストは初めに御言葉と聖霊を弟子たちに授け、ペンテコステの時期の終わりには、弟子たちが御言葉と聖霊を世界に授けた。

キリストが弟子たちに息を吹きかけたときに成し遂げた御業は、エマオへの道で弟子たちと共に成し遂げたばかりの同じ御業に対する第二の証しであった。

そして、彼らが互いに語り合い、論じていると、イエスご自身が近づき、彼らと共に行かれた。しかし、彼らの目はふさがれていて、彼だとわからなかった...

そこで彼は彼らに言われた、「ああ、愚かな者たち、預言者たちが語ったすべてのことを信じるのに心の鈍い者たちよ。キリストはこれらの苦しみを受けて、その栄光に入るべきではなかったのか。」そして、モーセとすべての預言者に始めて、聖書のあらゆる箇所からご自身についてのことを彼らに説き明かされた。やがて彼らが向かっていた村に近づくと、彼はなお先へ行くつもりのように振る舞われた。だが彼らは彼を強いて引き止めて言った、「私たちと一緒に泊まりください。夕方になり、日はすでに傾いていますから。」そこで彼は彼らと共に泊まるために中に入られた。やがて彼らと食卓についたとき、彼はパンを取り、祝福して、裂き、彼らにお与えになった。すると彼らの目が開かれ、彼を認めたが、彼は彼らの目から姿を消された。彼らは互いに言った、「道で私たちに話してくださり、聖書を説き明かしてくださったとき、私たちの心は内に燃えていたではないか。」ルカによる福音書 24:15、16、25-32。

エマオでイエスが「食卓に着かれた」と同様に、その後、弟子たちと食事をされた。どちらの場合も食事が表されている。これらを合わせると、ペンテコステ期の始まりが、聖霊の息吹と食事によって示されていることがわかる。開始の出来事は、信じる一派と疑う一派との間に論争を生む。食事、聖霊が与えられること、聖書が開かれることには、キリストが「モーセとすべての預言者」から教えを始められたことも含まれている。キリストの教えは、モーセの預言の筋道を取り、それをすべての預言者の筋道と照らし合わせることによって、「ここにも少し、あそこにも少し」という仕方で伝えられた。

9月11日、エゼキエル書にある四方の風の息が、三十七章の干からびた骨の上に吹きかかった。その時、1840年8月11日に降りて第一の天使のメッセージに力を与えた天使によって象徴されているように、黙示録18章の天使が、五旬節の初めに弟子たちが食べたのと同様に、食べなければならないメッセージを携えて降りてきた。トマスが信じようとしなかったことは、そのメッセージが導入される時に揺り動かしが起こることを示している。

9/11のツインタワーの崩壊について言えば、主は「諸国民を激しく揺り動かす」ために立ち上がられたと言われている。神の民の間に起こる「揺さぶり」は、真理のメッセージに立ち向かって戦う者たちによって引き起こされるのだということを、心に留めておくことが重要である。外的な「揺さぶり」もあるが、教会内部の揺さぶりは、メッセージが語られている状況の中で起こる。

私が見た揺さぶりの意味を尋ねると、それはラオデキア人に対する真の証人の勧告によって喚起される率直な証しが原因であると示された。これは受け取る者の心に働きかけ、彼に旗印を高く掲げさせ、まっすぐな真理を力強く語らせるだろう。だが、この率直な証しに耐えられない者もいる。彼らはそれに逆らって立ち上がり、これが神の民の間に揺さぶりを引き起こすのである。

私は、真の証人の証しが半ばも顧みられていないのを見た。教会の運命が懸かっている厳粛な証しは、軽んじられており、まったく無視されていると言っても過言ではない。この証しは深い悔い改めをもたらさねばならない。これを真に受け入れる者は皆、それに従い、きよめられる。『初期の著作』271頁。

内部の「揺さぶり」は、ラオデキアのメッセージの提示に反対する者たちによって引き起こされる。ホワイト姉妹は、ジョーンズとワグナーの1888年のメッセージをラオデキアのメッセージであると述べている。

「A. T. ジョーンズとE. J. ワグナーによって私たちに与えられたメッセージは、ラオデキアの教会への神のメッセージであり、真理を信じると称しながら、神から授けられた光を他者に映し出さない者には災いあれ。」『1888年資料』1053。

ラオデキアのメッセージへの抵抗は揺り動かしを引き起こし、ホワイト姉妹は1888年のメッセージを黙示録18章の天使の降臨と結び付けている。

先入観を捨て、この真理を受け入れることをよしとしない心が、ミネアポリスにおいてワグナーおよびジョーンズの兄弟たちを通して与えられた主のメッセージに対して示された反対の大部分の根底にあった。サタンはその反対を煽ることによって、神が彼らに授けたいと切望しておられた聖霊の特別な力を、私たちの民から大いに遮断することに成功した。敵は、五旬節の日の後に使徒たちがそれを宣べ伝えたように、彼らが真理を世界に運ぶうえで本来彼らのものとなり得た効力を、彼らが得るのを妨げた。全地をその栄光で照らすはずの光は拒まれ、私たち自身の兄弟たちの行動によって、大いに世界から遠ざけられてきた。『選ばれたメッセージ』第1巻、235。

ペンテコステの季節の初めにおけるトマスの疑いは、ペンテコステの日に到来したメッセージに対する反抗を表す型であり、1888年にジョーンズとワグナーによって提示されたラオデキアの教会へのメッセージに、セブンスデー・アドベンチスト教会の指導部が立ち上がって抵抗したときに起こった揺さぶりを象徴していた。1888年には、黙示録18章の力強い御使いが、その栄光で地を照らすために降りて来たが、指導者たちが先入観を捨てようとしなかったことが大きく影響して、コラ、ダタン、アビラムの反逆が繰り返された。トマス、ペンテコステのときのユダヤ人たち、モーセの時代のコラの反逆、1888年の反逆はみな、ヨエルによればラッパが吹き鳴らされるはずであった9/11を象徴している。そのラッパは、イザヤによれば、神の民の罪を明らかにするために吹き鳴らされ、したがって1888年とラオデキアへのメッセージを象徴している。「古い道」へ立ち帰るためにラッパを吹くエレミヤの見張りは、イザヤがその声をラッパのように上げることと符合する。エレミヤの見張りはハバククの見張りでもあり、彼の歴史における論争や討論の中で自分の立場がどうなるのかという問いを発する。

私は見張りの持ち場に立ち、やぐらに身を置き、彼が私に何と言われるか、また私が戒められるときに何と答えるかを見よう。ハバクク書 2:1

「reproved」という語は「叱責された」または「反論された」を意味し、次の節が答えを与えていることから、問いを暗に示している。

主は私に答え、こう言われた。「幻を書き記し、それを板にはっきりと記せ。走りながらでも読めるように。」ハバクク書 2:2

ミラー派の歴史の成就において始まった「論争」あるいは「揺り動かし」とは、ウィリアム・ミラーのメッセージと彼の預言解釈の規則が、プロテスタントの神学者たちと対峙したことであった。ミラー派の歴史における論争は、1840年8月11日にミラー派のメッセージが確証されたときに始まり、その時、ヨハネが取って食べるはずの小さな巻物を携えて降りてこられたのは、「ほかならぬイエス・キリスト」であった。ハバククの見張り人の論証、トマスの疑い、1888年の反逆、コラの反乱、五旬祭（ペンテコステ）での「酔っている」との主張はすべて、9/11に始まった論争の証しとなっている。論争の的は後の雨のメッセージであり、それは9/11に注がれ始めた。

ミラー派が1843年の図表を作成するに至ったハバクク書の答えは、礼拝者が二つの階級に分かれていくことと結びついており、その例としては、コラとその仲間対モーセ、トマスとほかの弟子たち、五旬祭におけるユダヤ人の酔っているとの主張、1888年のアドベンチズムの指導層、1844年のプロテスタント対ミラー派、そして1844年10月22日の愚かな乙女と賢い乙女が挙げられる。

9/11に、キリストは弟子たちに息を吹きかけて聖霊を与えたが、それは日曜法における完全な注ぎ出しに先立つ、わずかな滴であった。続いて、キリストは彼らの理解を開き、弟子たちをエレミヤの古き道へと連れ戻すことによって、モーセから始まる「line upon line」の預言的メッセージを示された。そこで彼らは、警告のラッパを吹くために油注がれた。9/11におけるキリストの息吹は、エゼキエルとヨハネの四つの風から来たものであり、それはラオデキヤのメッセージ、すなわち拒まれると揺さぶりを引き起こす「まっすぐな証し」であった。1888年はコラ、ダタン、アビラムの反逆を型どるものであり、拒まれていたのはメッセージだけではなく、ラッパに確かな音を与えていた選ばれた見張り人たちもまた同様であった。

ホワイト姉は、「私が見た『揺さぶり』は、『ラオデキヤ人への真の証人の勧告によって呼び起こされる率直な証し』によって引き起こされるだろう」と記した。1888年のメッセージはその率直な証しであり、1888年と9/11は共に、黙示録十八章の天使の降臨を示している。

眠っている人々を目覚めさせるために、私たちの諸教会と諸機関に対して率直な証しをしなければならない。

主の御言葉を信じて従うなら、着実な前進がなされる。今こそ、私たちの大いなる必要を見よう。主は、干からびた骨にいのちの息を吹き込まれるまでは、私たちをお用いになることができない。私はこう語られるのを聞いた。「神の御霊が心の奥底に働きかけることがなく、そのいのちを与える感化がなければ、真理は死んだ文字となる。」レビュー・アンド・ヘラルド、1902年11月18日。

9/11に、神のかつての契約の民への最後の呼びかけが発せられ始め、ラオデキヤ人へのメッセージは完璧に成就した。このときホワイト夫人は「眠っている者たちを目覚めさせるために、私たちの教会と諸機関に対して率直な証しがなされなければならない」と記している。ラオデキヤ人へのメッセージは、9/11に黙示録18章の御使いが降臨したときに

始まった。つまり9/11において、ラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチストへのメッセージは、当時も今も「目を覚ませ」である。ヨエル書1章5節で、酔いどれどもに目を覚ませと命じている。9/11はアドベンティズムにとって最終の試練期間の到来を示し、それはヨエルの「目を覚ませ」という命令を表している。ペンテコステの季節の始まりは、9/11における神の民の覚醒から始まり、日曜令の直前に十人の乙女のたとえが成就することによって終わる。

9/11における目覚めは、背教に陥っている契約の民の最後の世代への呼びかけである。日曜法の直前の目覚めは、かつての契約の民に対して扉を閉ざす。始まりと終わりは同じであり、2023年7月には、黙示録11章の二人の証人が、2020年7月18日の予言が反逆であることに目覚めさせられた。中間の目覚めは反逆によって表されており、それは9/11をヘブライ文字の第一の文字、2020年7月18日を第十三の文字、そして日曜法を第二十二にして最後の文字と見なす。第二十二の文字は、それら三つの目覚めの最後において最終的に完成する、神性と人性の結合を表している。

主は9/11に「枯れた骨に命の息を吹き込む」。それは、ペンテコステの時期の始めに主が弟子たちに聖霊を吹きかけたのと同じである。主の昇天後の弟子たちは、聖霊を受け、その後「行に行を重ねる」という方法論によって預言の御言葉の理解が開かれた者たちを表している。聖霊を受けたのは食事の最中であった。というも、霊的に食べるとは、御言葉であるイエスの肉を食べ、その血を飲むことを要するからである。

コラ、ダタン、アビラムに加わった反逆者たちは（1888年のアドベンチズムの指導部も同様に）、神の民の罪を指摘し、レビ記26章の「七たび」によって表される基礎的真理、すなわち古き道への回帰を呼びかけるラッパのメッセージに反対することによって、揺り動かしを引き起こす階層を表している。ラッパはリバイバルと改革の双方を呼びかけている。ミラーが挙げた預言の宝石のうち最初のもの、そしてアドベンチズムによって最初に退けられたものは、ミラー派運動の始まりと終わりを表している。ミラー派が宣べ伝えた第一の天使のメッセージの始まりと終わりは、モーセの「七たび」によって画されている。初めにはそれは受け入れられ、終わりには退けられた。その拒否のゆえに、エゼキエルはアドベンチズムを干からびた死骨の谷として描いている。1863年から米国における日曜法に至るまでの期間は、イザヤ書22章によれば「幻の谷」であるが、エゼキエルによれば干からびた死骨の谷である。これら二つの預言的な谷はいずれも、ヨエルが「決断の谷」とも呼ぶヨシャパテの谷と一致している。

これらの概念を踏まえると、9/11にヨエル書がペンテコステのときにペテロが示したメッセージとなったのはどのようにしてか、という問いが生じるかもしれません。これらの概念を以下の記事で明らかにしていきます。

(1892年11月5日、南オーストラリア州アデレードより、「親愛なる甥と姪、フランクとハッティー [ベルデン] へ」宛てて書かれた。)

聖霊に照らされるなら、あなたはミネアポリスでのあの邪悪を、あるがままに、神がそれをご覧になるとおりに見るようになるでしょう。もしこの世で二度とあなたに会うことがないとしても、あなたが何のゆえもなく私に負わせた悲しみと苦悩、そして魂の重荷について、私はあなたを赦していることを確信してほしい。しかし、あなた

の魂のために、またあなたのために死なれた方のために、あなたが自分の誤りを認め、告白してほしい。あなたは神の御霊に逆らった者たちに加わったのです。主がジョーンズ兄弟とワグナー兄弟を通して働いておられたことについて、あなたには必要なだけのすべての証拠が与えられていたのに、あなたはその光を受け入れませんでした。そして、感情に身を任せ、真理に逆らう言葉を口にしたあとで、自分が過ちを犯したこと、彼らが神からのメッセージを携えていたこと、そしてあなたがメッセージと使者の双方を軽んじていたことを、告白する気にはなれなかったのです。

私は、ミネアポリスで表れたような、これほど確固たる自己満足と、光を受け入れ認めようとしなない心を、私たちの民の間にかつて見たことがありませんでした。私は、あの集会で示された精神を大事にした一団のうちのだれひとりとして、彼らが高ぶりを捨ててへりくだり、神の御霊に動かされていたのではなく、むしろ思いと心が偏見で満ちていたのだと告白するまで、天から彼らに送られた真理の尊さを見分ける明確な光を再び持つことはない、と示されました。主は彼らに近づいて彼らを祝福し、彼らの退転をいやすことを望まれましたが、彼らは聞き入れませんでした。彼らは、コラ、ダタン、アビラムを駆り立てたのと同じ精神によって動かされていました。イスラエルのあの人々は、自分たちが誤っていることを証明するあらゆる証拠に逆らうことを固く決め、多くの者が引き込まれて彼らに合流するまで、離反の道を歩み続けました。

彼らは何者であったのか。弱い者ではない。無知な者でも、悟りのない者でもない。あの反逆には、会衆の間で名高いつかさが二百五十人、すなわち名だたる男たちが加わっていた。彼らの主張は何であったか。『会衆は皆、ひとりひとりが聖であり、主は彼らのただ中におられる。それなのに、なぜあなたがたは主の会衆の上に自らを高くするのか。』[Numbers 16:3] コラとその仲間が神の裁きのもとに滅ぼされたとき、彼らに欺かれていた人々は、この奇跡に主の御手を見なかった。翌朝、会衆全体はモーセとアロンを非難して、『あなたがたは主の民を殺した』[verse 41]と言い、疫病が会衆に臨み、一万四千人を超える者が滅んだ。

私がミネアポリスを去ろうと決心したとき、主の使いが私のそばに立って言った。「そうしてはならない。神はこの場所であなたに行うべき働きを与えている。人々はコラ、ダタン、アビラムの反逆を繰り返している。光のうちにいない者たちはそれを認めようとしなないが、わたしはあなたをしかるべき位置に置いた。彼らはあなたの証しに耳を貸さない。だが、わたしはあなたと共にいる。わたしの恵みと力があなたを支える。彼らが悔っているのはあなたではなく、わたしの民に送る使者と、わたしが送る言葉である。彼らは主の言葉を軽んじた。サタンは彼らの目をくらませ、判断を歪めた。そして、各々の魂がこの罪、すなわち神の霊を侮辱するこの聖められていない独立心を悔い改めないなら、彼らは闇の中を歩むだろう。彼らが悔い改めて立ち返り、わたしが彼らを癒やすようにならないなら、わたしは燭台をその所から取り除く。彼らは霊の視力を曇らせてしまった。彼らは神がその霊とその力を現すことを望まない。というのは、彼らがわたしの言葉をあざけり、嫌悪する霊を持っているからである。軽薄さ、軽んじること、たわむれや冗談が日々行われている。彼らは心を定めてわたしを求めていない。彼らは自分で焚きつけた火の火花の中を歩み、悔い改めないなら悲しみのうちに身を横たえることになる。主はこう言われる。務めの持ち場に立て。わたしはあなたと共におり、あなたを離れず、あなたを見捨てない。」神からのこの言葉を

、私はあえて無視することはできなかった。

バトルクリークには、澄みわたる明るい光が輝いてきた。しかし、ミネアポリスでの会議に関わった者たちのうち、誰が光のもとに来て、主が天から彼らに送られた豊かな真理の宝を受け取ただろうか。指導者であるイエス・キリストと歩調を合わせ続けてきたのは誰か。自分たちの誤った熱心、盲目、ねたみと邪推、真理への反抗を、十分に告白したのは誰か。ひとりもない。そして、長く光を認めることを怠ってきたため、光は彼らをはるか後方に置き去りにした。彼らは、わたしたちの主キリスト・イエスにある恵みと知識において成長してこなかった。彼らは、本来受けることができ、信仰経験において彼らを強い者としたはずの、必要な恵みを受け損ねてきた。

ミネアポリスで取られた立場は、見たところ打ち破りがたい障壁であり、かなりの程度において、彼らを疑う者、問いただす者、そして真理と神の力を拒む者たちと同じ陣営に閉じ込めてしまった。次の危機が来るとき、証拠に証拠を重ねて積み上げられたものに長らく抵抗してきた者たちは、彼らがあればほど明白に失敗したその点で再び試されるだろう、そして彼らにとって、神からのものを受け入れ、闇の力からのものを拒むことは難しいだろう。ゆえに、彼らにとって唯一安全な道は、謙遜のうちに歩み、自分たちの足のためにまっすぐな道を整えて、足のなえた者が道を踏み外すことのないようにすることである。私たちが誰と交わるかはすべてを左右する。神とともに歩み、神を信じて頼る人々と共にいるのか、それとも自分たちの思い込みの知恵に従い、自ら起こした火の火花の中を歩む人々と共にいるのか。

真理に逆らって働いてきた者たちの影響力を打ち消すために要する時間と配慮と労苦は、甚大な損失であった。というのも、私たちは靈的知識において何年も先を行っていたかもしれず、また、光のうちを歩むべきであった人々が主を知ることを見続け、その出で立ちが暁のように確かであることを知っていたなら、実に多くの魂が教会に加えられていたかもしれないからである。しかし、神がご自分の民に送られる真理に対して花崗岩の壁のように立ちはだかつてきた働き人たちの影響力を打ち消すために、まさに教会の内部でこれほど多くの労苦を費やさねばならないとき、世は相対的な暗闇の中に取り残されてしまう。

神は、見張り人たちが立ち上がり、声を一つにして断固たるメッセージを発し、ラッパに確かな響きを与えることによって、人々が皆それぞれの職責の持ち場に直ちに就き、この大いなる業において自分の役割を果たすようにと意図しておられた。そのとき、大いなる権威を帯びて天から下ってくるあのもう一人の御使いの力強く澄んだ光が、その栄光で地を満たしていたであろう。私たちは何年も遅れている。そして、盲目のまま、神がミネアポリスの会合から燃える灯火のように出ていくことを意図されたまさにそのメッセージの前進を妨げた者たちは、神の前に心を低くし、自分たちの思いの盲目と心のかたくなさによって、この働きがいかに妨げられてきたかを見て悟る必要がある。

些細な事柄にこだわって言い争うことに何時間も費やされ、天の御使いたちは遅れにいら立ち、悲しみながら、黄金の機会が無駄にされてきた。聖霊—その価値や、すべての魂がそれを受ける必要性に対する認識は、あまりにも乏しかった。天からの賜物を受ける者は、義のよろいをまとして神のために戦うために出て行く。彼らは主の導きを尊び、そのあわれみのゆえに主への感謝で満たされるであろう。だが、実に多く

の場所で、また幾多の機会に、神の民であると公言する人々について、キリストの時代と同じことが真実として言える。すなわち、彼らの不信のために、多くの力あるわざを行うことができなかつたということである。暗黒の鎖につながれていながら、神に用いられたがゆえに尊重されてきた人々が多くいる。しかし彼らの不信は、人間の器を通して天の御使いたちが伝えようとしていた真理のメッセージ—信仰による義、キリストの義—に対して、疑いと偏見を引き起こした。『1888年資料』1066-1070。